

保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人みんなぎ
施設名	ふらっと保育園
報告者（役職）	雨宮 妙（専門リーダー） 木村和孝（理事長）
住所・連絡先	さいたま市緑区原山2丁目3番26号
	☎ 048-789-6655
	E-mail huratto-hoikuen@minnagi.or.jp

○タイトル（保育計画）

身体を動かす楽しさを知ろう！

○主な助成備品

巧技台

1. 保育計画策定の目的

巧技台を活用する事で、子どもの運動の幅を広げ、一人ひとりの発達にあった経験を積むことができます。また、子ども達が遊びの中から自分の身体を知ることでもでき、身体を動かす楽しさを実感することができます。「できた」から自信につながり、自己肯定感が育つと考えています。

上記を踏まえ、運動空間の多様化を図ることで、現状の保育環境で達し得ない環境を子ども達に提供し、子ども達の発達を保障していく場づくりを目的としました。運動遊びを通して、体力・体幹を鍛えるだけでなく、創造力・思考力・道徳性、互いを認め合う力を育てていきたいと考えています。

2. 具体的な実施内容

○0歳児

- ・巧技台にマットをかぶせ、はいはいして渡る。
- ・階段のようにして上り下りをする。

○1歳児

- ・巧技台を1段、2段と子どもの発達状況に合わせて組み合わせ、上って下りたり、上ってジャンプしたりした。
- ・巧技台にマットをかぶせ、山登りを経験する。はいはいする子、保育士に補助してもらう子、一人でゆっくり歩く子ども、それぞれの状況に合わせる。
- ・巧技台やマットを組み合わせ、サーキットのようにして楽しんだ。

○2 歳児

- ・はしご 頭上を確認しながら、くぐることから始める。保育士のマネをして慎重にまたぐようになるなか、徐々に傾斜をつけ、高さを調整していき、手足の使い方を知らせながら、高這いで渡るなどのチャレンジに繋がる子の取り組みを支えることができた。
- ・平均台 ごっこ遊びで使用。モノレールに見立てたり、子ども自身がカニになりきり、横歩きを楽しむことができた。
- ・巧技台 ピンク色の巧技台を使用し、空間認知能力を育むために箱の中をくぐる遊びを行う。緑色の巧技台を2~3段重ね、両手をついて飛びつくという動作から始め、乗れるようになった所で、両足着地を意識するよう声かけを行った。
- ・すべり台 すべるだけでなく、逆さ登りを経験する。手を広げてバランスをとり、ゆっくり足下を確認し登らせたり、高這いで登らせた。

○3~5 歳児

- ・はしご 高這いで渡ることから始める。手と足の動き、運び方を知らせたり、補助することで、渡れる子が増えてきた。立って渡ることを勧めると、一人で渡れる子、保育士の補助が必要な子とそれぞれ見られるため、徐々に傾斜をつけたりすることで自信につなげ、達成感を味わえるようにすることができた。
- ・平均台 バランスをとりながらゆっくり渡る。3歳児は横歩きが多く見られ、歳児が上がるにつれて足を前にして渡っていた。子ども達の状況に合わせて、傾斜をつけたり、高くしたりした。傾斜の角度によっては、立って渡ることが難しく、四つん這いで腕の力を用いて腕と身体を協応して渡っていた。
- ・巧技台 3段から始め、手のつく位置や両手をつき両足で飛びつくことに留意し、進めて行く。腕の力だけで乗るのではなく、身体の重心を意識できるように保育士が知らせ、全身の力を使って両足の裏が巧技台につくようにした。
- ・すべり台 巧技台に飛び乗り、すべり台をすべることから始めた。腹ばいで、慎重にすべる子もいた。身体のバランスを調整しながら、立って上り下りする子も見られた。
- ・すべての巧技台を使ってサーキット遊びをする中で、一人ひとりの子どもの発達に合わせて、それぞれの子どもが十分に楽しめるように工夫していた。また、できた喜びを保育士や友達と共有し、自信につなげたり、年上の子への憧れから、チャレンジしようとする心を育てることに努めた。

3. その成果と評価

○0 歳児

斜面登りや階段登りなど初めての経験で、不安な様子が見られていたが、繰り返し行うことで子ども達が積極的に取り組むようになった。「できた」経験を積み重ねることでチャレンジしようとする心が育ったように感じる。

○1 歳児

歩行が確立し、探索が盛んになってきた子ども達にとって、巧技台に乗り、視点が高くなったことで、いつもと違った見え方を喜ぶ姿が見られた。サーキットをつくることで、狭い部屋でも子ども達が十分身体を動かすことができた。また、好奇心旺盛な子ども達の感性を刺激し、身体を動かす事への興味・関心が高くなった。

○2 歳児

回数を経験することで、身体の動かし方、使い方を身体で覚えていった。巧技台の飛びつきでは、保育士が手すりの位置や、飛びつきの見本を見せることで腕や全身の力を使い飛びつけるようになっていった。

○3～5 歳児

巧技台を使うときに、子どもの意識を、手をついて飛びつくことに集中させることで腕や肩の筋肉が発達し、自分の腕・肩で自分の身体を支える事ができるようになった。そのため、転んだときに顔を打つことが少なくなり、けがも減少している。

全身のバランスをとる力が身につき、ボディイメージが高まることで、体の動きがスムーズになってきている。異年齢で行うことで、年上の子をまねて挑戦する姿が見られたり、もっとうまくやりたいという気持ちが芽生え互いに刺激となり、互いに高め合うようになっている。一人ひとりの身体レベルにあった活動を提供することで、普段体を動かさない子どもも挑戦する姿が見られたり、支援の必要な子どもも、いっしょに楽しむ事ができた。

全年齢を通して、結果的に一人ひとりの身体能力の向上に繋がっていった。保育士に頑張っている姿を認めてもらい、できたときの喜びを共有する経験が自信に繋がり、自己肯定感を育んでいると考えます。

運動会や発表会で、子ども達の成長を保護者の方々にも見て頂く機会を作っている。その中で、挑戦する姿や楽しむ姿があり、保護者の方にも喜んでもらっている。

4. 今後の課題と展望

引き続き、一人ひとりの身体レベルにあった内容で行い、楽しみながら身体能力を向上していきたいと考えている。また、子ども達の発達を保障し、思考力・道徳性、互いに認め合う力を育てていけるよう努めていく。

課題としては、職員一人ひとりが、子どもの発達・育ちを把握し、どのように遊びに取り入れていけるかである。今後は、子ども達にも巧技台をより積極的に活用していけるような保育計画・企画を考え、より有効な活用方法と子どもの育ちへの働きかけを検討していきたい。

以上